

主の祈りを中心に抱く「山上の説教」 - 祈りとしての実践 -

主の祈りが山上の説教全体に占める位置を、U. ルツの詳細な注解書「マタイによる福音書」の見解を援用して、確かめたい。また「主の祈り」を導入しているイエスのことばの意味を考えてみたい。そうすることで「山上の説教」全体が祈りに裏打ちされていることを確かめたい。

1) 主の祈りを中心に抱く構成

ルツは、「山上の説教」が主の祈りを中心として、その周りに対称的に構築された構成を持つことを示した（前掲書）。その構成は以下のとおり（別紙の資料参照）。

状況描写（5：1以下）は山上の説教後の聞き手の反応（7：28－8：1）と、「群衆、教える、上るないし降りる、山」のことばをキーワードとして対応している。

「幸い」と地の塩・世の光の部分は、「天の国というキーワードと三人称から二人称へそして二人称から三人称へという人称の交代によって結論部分（7：13－27）と対応する。

主部の序と結論部分・・・「律法と預言者」による囲い込み

主部の「対立命題」部分は、「天に宝を積み」に始まり「求めなさい」に至る「財産、裁き、祈り」の部分（6：19－7：11）と段落の長さで対応が認められる（ネストレのギリシャ語聖書でおのおの56行）という。

施し、祈り、断食という三つの敬神のわざは、施しと祈りの部分（6：1－6）が「主の祈り」の枠の前に置かれ、断食の部分がその後に置かれている。

こうした対応する部分を線や点線で結ぶと、資料図のように驚くべき構成図が浮かび上がることになる。つまり「山上の説教」はその中心に「主の祈り」を抱いた対称的な構成を持つ。あるいは「主の祈り」を土台とした左右対称の重層的な構造物を見る思いがする。

2) 祈りとしての実践

むろんすべての学者がこの見解に賛成しているわけではないが、ルツのこの分析はマタイが「主の祈り」を意図的に中心においたことを否めない。実践を大切にするマタイの意味では「山上の説教」がその中心においては祈りであることを見落とす解釈は、マタイの意味では、誤解である」というルツの主張は重要である。

「山上の説教」がディダケーに基づくのなら、先立つものが前提になっており、福音告知、悔い改め、信仰、信頼に満ちた委託が先立つ、「生きられた信仰」だ（J. エレミアス）。生きられた信仰ならば、祈りつつ生きるであろう。

「幸い」から始まり、地の塩・世の光を経て「対立命題」、「神の前の義」へと順次読みすすむわたしたちは、その徹底した主の言葉に打たれながら中心部の「主の祈り」へと導かれてゆく。

「主の祈り」を教えられ、「主の祈り」を心に抱きつつ新たな「キリスト者の義」の実践へと促されてゆき、その実践が隣人愛にまとめられることを知る（黄金律と「律法と預言者」の統合）。

3) マタイが主の祈りの導入としている主の言葉の意味することは？

5, 1f  
情況

枠

7, 28-8, 1a  
聞き手の反応

I: ὄχλοι(群衆), διδάσκω(教える), ἀνα(κατα)βαίνω(登る, 降りる)... ὄρος(山)



記号の意味 I = 囲い込みのキー・ワード  
L = 段落の長さの対応  
F = 別の形式上の対応